巻頭言

「フィジカルセキュリティと サイバーセキュリティの境界線」

公益社団法人　日本防犯設備協会　常任理事
オーテック電子株式会社　代表取締役社長　上原　英明

先日、学生時代の友人と酒を酌み交わしながら、昭和60年前後、大学生時分の他愛のない思い出話に花を咲かせていた時のこと。やがて話題は当時流行していたポータブルプレーヤー「ウォークマン」に行きつきます。前日の晩一生懸命録音したカセットテープを翌日忘れてしまってショックだっただの、今は全てのアルバムをスマホで持ち歩ける便利な世の中になっただのと、ありがちな話でまた盛り上がるのです。とはいえその頃はカセット1本忘れたところでさほど致命的な事態に陥ることはなかったが、今はちょっとした操作ミスや事故によりデータが全削除されてしまったり、さらには悪意のある者に、スマホの中身全部をハッキングされてしまう危険性も十分ある、と方向が変わり、自分達のスマホの中身にいかほどの経済価値があるか否かはさておき、話題はデジタル技術の危険性から情報セキュリティへと展開して行くのでした。

確かにその当時以降、身の周りのものが急速にデジタル化されていき、CDやMD、さらにはSDカード等のストレージと、次から次へと登場するデジタル機器に、空恐ろしさを少し感じながら、それでもやはり利便性を享受していた記憶があります。

電子メールが多くの組織で利用されるようになり、通信手段に画期的な進化をもたらした頃、とある官公庁にて、職員が同僚に送るはずだったラブレターをうっかり組織全員に送信してしまったということがニュースとなりました。日本社会が、便利なデジタルツールは一つ間違うと恐ろしいことになる、ということを認識した最初の頃の事案であったと思います。

時は流れ、今や身の回りのありとあらゆるものがIT制御されるようになってきました。各種防犯設備という物理的な侵入から防御する仕組みを提供している私達は、自分達の仕事をITの専門家達がケアをする情報セキュリティとは別次元の仕事、という理解をしていたように思います。しかしながら、防犯設備もシステムとして統合し提供するケースが増えてきた今日では、やはりIT制御の占める割合が非常に大きなものとなってきています。日常の我々のビジネス活動も、多くの部分においてIT技術の恩恵を受けており、今やこの技術なしでは生活もビジネスも成り立たなくなってきている現代、私達はそれが安全性とのトレードオフの関係であることも強く認識しなければならないと思うのです。前述の通り、この世界では些細な不備がシステムやサービス全体を破壊する危険性を持ち合わせ、さらには外部からのサイバー攻撃も日常化しています。

もちろんこうした攻撃に対抗するサイバーセキュリティの技術は日進月歩の進化を遂げてきていますが、どんなに技術が進歩しても、それを扱う人間こそが最大・最弱のセキュリティホールと言われるのも事実です。前述のメール一斉送信の件は、当人達はともかく、大きな経済損失に結び付くものではありませんでしたが、その後も、メール誤送信が情報漏洩に結び付き、大きなインシデントへ発展する例は枚挙にいとまがありません。次いで2017年には、WannaCryというランサムウェアの感染が欧州から世界150か国以上へ広がり、経済活動に甚大な被害を生じさせました。これも、既に公表されていたセキュリティパッチを適用していなかったPC利用者が狙われ感染が一気に拡大したものであり、やはりヒューマンエラーの側面があったことは否めません。

今後、経産省が発表したSociety5.0コンセプトのもと、我が国のデジタルトランスフォーメーション（DX）も益々加速させる必要があります。フィジカルとサイバーの環境が境界をなくし、共に補完し合う状況へと進む中、フィジカルセキュリティを主業とする私達も、私自身を含め、まずは個人レベルとしてサイバーセキュリティに関するリテラシーをさらに高める必要があると強く感じるのです。

オヤジたちのとりとめもない与太話が、そんな話題に発展しているうちに、お店は閉店の時間となっていました。ほろ酔い気分の二人にとっては、スマホを「物理的に」置き忘れてしまうことが最大のリスクです。心もとない足取りとなりながらも、それぞれ懐にスマホの存在をしっかり確認してから、飲み屋を後にしたのでした。